

Masahito TANAKA Contemporary Bassoon Music

昭和61年度文化庁芸術祭参加

田中雅仁リサイタル

現代バスーン音楽

ピアノ：角 聖子



1986年10月8日(水) 音楽の友ホール

マネージメント：神原音楽事務所

Programme

エリック・チャサロウ
E. CHASALOW

「竜の出現」

"Advent of the Wyvern" for Bsn. Solo (1975)

アラン・ベルノー
A. BERNAUD

「幻影」

"Hallucinations" for Bsn. & Pf. (1978)

ウィルソン・オズボーン
W. OSBORNE

「ラプソディー」※

"Rhapsody" for Bsn. Solo (1958)

ジャクリーヌ・フォンティン
J. FONTYN

「微風」

"Zephyr" for Bsn. & Pf. (1985)



カールハインツ・シュトックハウゼン
K. STOCKHAUSEN

「友情」

"In Freundschaft" for Bsn. Solo (1977)
(Bassoon version-1982)

パル・カロリー
P. KAROLYI

「コントルニ」

"Contorni" for Bsn. & Pf. (1970)

ウジュヌ・ボザ
E. BOZZA

「ノクターンとダンス」※

"Nocturne-Danse" for Bsn. & Pf. (1967)

* 印以外、本邦初演

今日に至るまでの木管楽器の歴史をふりかえってみると、機構的にはほぼ現在のシステムになったのは、大体1870年頃と思われます。バスーンもこの頃ヘッケル (J. A. Heckel・1812~1879) によって、画期的な改良がなされました。しかし、現在使われているメカニズムを全て備えたのは、さらに50年ほど経った1920年頃です。とりわけ、その後のめざましい演奏技術の進歩と、リードの改良によって、現在では他の木管楽器と同じように、ソロ楽器としても十分な能力を持っています。

現代のバスーンは、4オクターヴという広い音域と大きなダイナミクス・レンジ、そして色彩豊かな音色に加えて敏捷性をも備えており、決して、「オーケストラの道化」といわれてきたような、おどけた表現のみ得意な楽器ではありません。

特に1950年以後、バスーンのために書かれた曲は数多く、バロック、クラシック時代の曲数を凌ぐとすら思われます。

しかし、曲数の多さにもかかわらず、いまだにバスーンの現代曲は演奏される機会が大変少ないのです。そしてその最も大きな理由は現代の新しいテクニックがまだ十分に紹介されていないことだと思われます。特にバルトロツィ (B. Bartolozzi) によって提唱された、「新しい音」(New Sources of Musical Expression) は近年多くの作曲家によって使用され、1980年以後に作曲された作品のほとんどにみることがができます。バスーンのもつ「新しい音」とは、グリッサンド、ハーモニクス、四分音、重音、フラッター・タング、タング・ピツィカート等々、数多くあり、広い音域とダイナミクスの中で、これらのテクニックを大変効果的に使うことができます。

この「新しい音」を含めて、現代のバスーン音楽を紹介することは、数年前からの私の計画でした。今回のリサイタルで、皆様にバスーンの新しい可能性、表現力を認めていただければ幸いです。

● 重音 (multiple sounds)

数個の音が同時に奏されるわけですが、すべてが均等の音量で鳴るわけではないので、音量の大きいものがキャラクターを支配しています。フォンティンの曲では、この音量の差が効果的に使われています。またカロリーの曲では、2つの接近した音の音量とピッチによる「唸り」の効果があらわれています。重音は、フィンガリング、アムブシュア、息の量の組みあわせてコントロールされます。

● タング・ピツィカート (tongue pizzicato)

リードが振動しないように唇でコントロールしながら息を送りこみ、同時に舌でリードを打つ奏法で、打楽器的な効果があります。

● フラッター・タング (flutter・tongue)

バスーンの場合、リードが口腔内にはいつているため、フルートのように舌の先を振動させることは不可能です。従って軟口蓋を振動させて同種の効果を出します。フランス語の「R」の発音をする時の状態によく似ています。

● グリッサンド (glissando)

奏法は三種類あり、唇と息の圧力を変化させて行うもの、フィンガリングによるもの、そして最も使うことが多いのは、この二つを組み合わせたものです。

● 単音上のセクエンツ (sequences on a single sound)

一定のアムブシュア、息の量で一つの音を吹きながら、フィンガリングによって微妙に異なる響きとピッチを交互に鳴らすためにフラッター・タングのような効果を与えます。しかし、フラッター・タングより鮮明で、またスピードのコントロールが可能です。

以上で本日使用される新しい奏法を説明いたしました。この他にも

トレモロ。

音と声を同時に出すもの。

リードのみによる奏法。

リードとボーカルによるもの。

複数のリードによるもの。

ボーカルと楽器のみでリードを使わないもの。

ハーモニクス。

四分音。

トリル、トレモロ上のグリッサンド。

重音上のトレモロ。

重音上のセクエンツ。

等々の奏法が合計40種類近くもあります。これ等については、また次の機会に紹介したいと思っております。

Eva Weisse
エヴァ ヴァイセ

「竜の出現」

エリック・チャサロウ

エリック・チャサロウは1954年生まれのアメリカの若手作曲家・サクソフォーン奏者である。ボストンのニューイングランド音楽院で学んだ。「竜の出現」は、のびやかなメロディーが高音域で歌われた後、一転して速く、アクセントの強い動きが中・低音域で奏される。この二つの対比が鮮やかである。この曲名の「竜」(Wyvern)とは、ヨーロッパで紋章として使われている翼のあるもので東洋の竜とは異なる。この曲は1976年ボストンで田中により初演された。

「幻影」

アラン・ベルノー

ベルノーは1932年、パリに生まれたフランスの作曲家である。パリ音学院で学び、1963年より同校教授の地位にある。チェロのための「Oblisques」フルートのための「Incantation」等の代表作がある。この「幻影」は1978年のパリ音楽院卒業試験課題曲として作曲され、同校バスーン教授のM・アラールに捧げられた。バスーンの広い音域を十分に利用した、ゆったりとしたオープニングから、はぎれのよい第二部が続き、6連符のめまぐるしい音群の後、幻想的なけだるいメロディーで曲を終る。

「ラブソディー」

ウィルソン・オズボーン

この「ラブソディー」は現代アメリカの作曲家オズボーンの唯一のものともいえる作品である。アメリカのバスーン奏者S・シェーンバッハに捧げられた。オズボーンはこの曲でバスーンのダイナミックな速い動きを用いず、静かな長いフレーズの中に叙情的な感情を織りこんだ。バスーンの音色の魅力を十分に発揮した名曲である。

「微風」

ジャクリーヌ・フォンティン

フォンティンは1928年、アントワープに生れたベルギーの女流作曲家である。ブリュッセル、パリ、ウィーンで学んだ。1970年よりブリュッセル音楽院作曲科教授の地位にある。彼女の作品は世界各地で演奏され、またレコーディングもされている。なかでも1976年「エリザベート国際コンクール」本選の課題曲として書かれたヴァイオリン協奏曲は有名である。

この「微風」では重音とグリッサンドが効果的につかわれており、随所にみられる速いパッセージ、高音域と共に、現代バスーンのキャラクターが良く生かされている。この作品は1985年、ベルギー、ナミュール市において、田中とピアニストA・ドゥ・グロートによって初演された。

「友情」

カールハインツ・シュトックハウゼン

この「友情」の原曲は1977年7月、クラリネット奏者S・ステファンの誕生日のプレゼントとして作曲されたが、公開の初演は同年8月、フルートによって行なわれた。以後現在までフルート、クラリネット、バセットホルン、バスクラリネット、オーボエ、チェロ、バスーンで演奏されている。バスーンでの初演は1982年10月ロンドンでK・ウォーカーによって行なわれた。冒頭より長い短二度のトリルまでの間にこの曲を構成しているパターンの原型が見いだされる。また、柔らかく静かな高音域、大きく力強い低音域、トリルを多用した中音域の三つのラインが明確であり、この対比を強調する動作が指示されている。後半に奏される二つの長大なカデンツ（「自由に」と「情熱的に」）は大変印象的である。

「コントルニ」

パル・カロリー

カロリーは1934年、ブダペストに生れた現代ハンガリーの代表的作曲家である。ブダペスト音楽院とアカデミーで作曲を学び1962年の卒業と同時に州立音楽学校の教授となった。彼の初期の作品は、今世紀のフランス音楽、特にオネゲルの影響が大きかった。そして1960年代後半からはヨーロッ

パ・アヴァン・ガルドの作曲家達の影響を受け、特に器楽曲で新しい手法を用いている。「コントルニ」は1970年に作曲された。

「重音」、「タング・ピツィカート」、「フラッター・タング」、「グリッサンド」等、新しいテクニックが自由に使われている。またピアノにもクラスター等の奏法が使用されており、「新しい音」が追及されている。

「ノクターンとダンス」

ウジュヌ・ボザ

ボザは1905年、ニースに生れたフランスの作曲家である。パリ国立音楽院に学び、ヴァイオリン、指揮、作曲それぞれに一等賞を得ている。1939～1948の間オペラ・コミックの指揮者として活動し、1951年にはヴァランシエンス音楽院の学長に就任した。彼の国際的な名声は主として秀れた木管楽器のための曲によるものである。それらの曲は20世紀フランス典型ともいふべき優雅なメロディーと繊細さに溢れている。

「ノクターンとダンス」は1967年に作曲された。前半のノクターンではバスーンの広い音域と大きなダイナミクスが効果的につかわれており、後半のダンスでは速い動きの中にも細かいニュアンスが織りこまれている。

バスーン

田中 雅仁
Masahito Tanaka



- 1951年 東京生れ。
- 1966年 元日本フィルハーモニー首席奏者、戸沢宗雄氏に師事。
- 1974年 3月桐朋学園大学音楽学部を音楽賞を得て卒業。5月読売新聞社主催新人演奏会に出演。9月ボストンのニューイングランド音楽院に留学。M. ルジエロ氏に師事。
- 1975年 G. シューラーのニューイングランド・コンテンポラリー・ミュージック・アンサンブルのソロ・バスーン奏者となる。現代曲の世界、アメリカ初演多数。
- 1976年 ニューイングランド音楽院卒業。Master of Music を得る。5月ボストン・ポップス・ソリスト・オーデションに優勝。アーサー・フィドラー指揮のボストン・ポップスと共演する。7・8月タングルウッド音楽祭に参加。S. チェイピン・フェローシップをうける。9月ボストン大学芸術学部博士課程に入学。S. ウォルト氏に師事。
- 1978年 8月オランダへ渡りアムステルダムのスウェーリンク音楽院でJ. モスタード氏に師事。11月「ハーグ・フィルハーモニー」の首席奏者に就任。
- 1979年 9月「南西ドイツ放送交響楽団」の首席奏者に就任。

ピアノ

角 聖子
Seiko Sumi



- 福岡県出身。
末永博子氏に師事。
また、桐朋学園高校、音楽科で井上直幸、山岡優子両氏に師事。毎日学生音楽コンクール西部2位入賞。
九州交響楽団と協演、リサイタルを行なう。
- 1977年 西独フライブルグ国立音楽学校に入学。E・ピヒト、アクセンフェルト女史に師事。室内楽をA・ニコレ、W・マル

- 1980年 1月アムステルダムのスウェーリンク音楽院において客員教授としてリード・メイキングのマスター・クラスを開く。8月第一回草津インターナショナル・フェスティバルに招かれ、室内楽を演奏。また日本で発見されたJ.S. Bachのコーラル「Aus der Tiefen」の初演・独奏をつとめる。
- 1981年 8月「ベルギー国立歌劇場交響楽団」の首席奏者に就任（音楽監督J. プリッチャード、S. カンプラン）
- 1982年 12月～83年4月モーリス・ベジャールの20世紀バレエ団とパリ、ブリュッセルで共演。また同バレエ団のために、「春の祭典」「兵士の物語」をレコーディングする。
- 1983年 6月札幌交響楽団と共演し日本にデビューする。
- 1984年 7月東京でリサイタルを行う。
- 1986年 2月帰国。
3月より新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者に就任。

現在までソリストとしてもヨーロッパ各地で演奏。放送、オーケストラとの協演も数多い。1987年にはノルウェー音楽財団の招きでオスロ音楽院においてモダン・リードメイキング、演奏解釈のマスタークラスを開く予定。また、オスロでリサイタル、録音を行う予定。レコードはEMI, Pavane, TRMより発売されている。

シュナー氏に師事。

- 1980年 同校首席卒業。
- 1984年 西独演奏家資格国家試験に首席合格。この間、フライブルグ現代音楽研究所主催の公演でシェーンベルグの室内楽他、現代曲初演を多く手がける。また、西独、ベルギーを中心にソロリサイタル及び室内楽のコンサート。他放送にも多く出演。
レコードはベルギー・シマース社より管楽との室内楽が発売されている。
- 1986年 帰国。